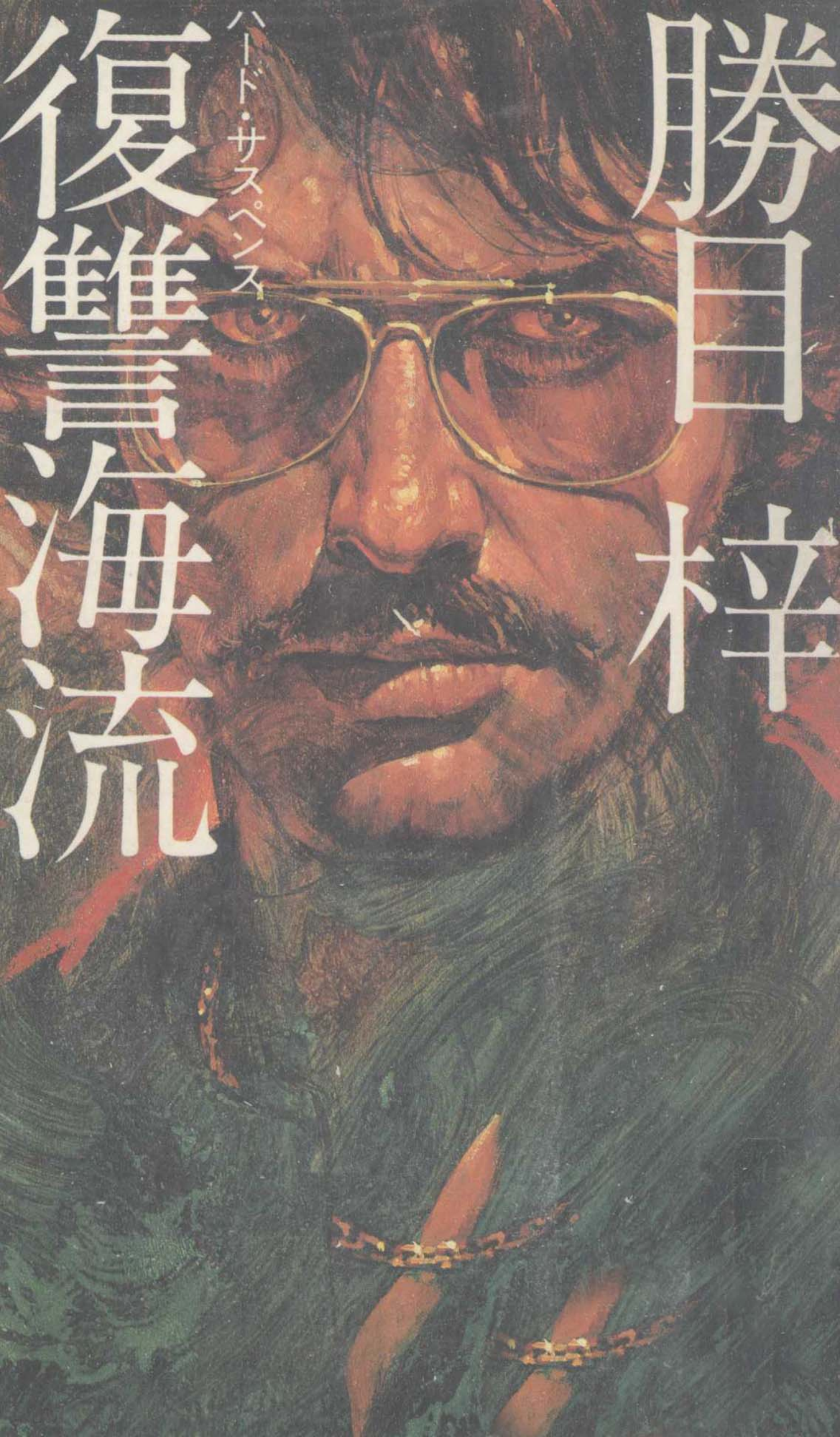
復讐海流

ハード・サスペンス

勝目梓



TOKUMA NOVELS

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四―四四三九二

勝目　梓
復讐海流

Azusa Katsume © 1981
カバー絵　生頼範義　カバーデザイン　矢島高光
本文挿絵　安岡　旦
落丁・乱丁はおとりかえいたします
〈編集担当　今井鎮夫〉
8―F30b

復讐海流

ハード・サスペンス

勝目梓

TOKUMA NOVEL

復讐海流（ふくしゅうかいりゅう）

勝目梓（かつめあずさ）

獣たちの熱い眠り』の映画製作発表会が、
本社で行なわれた。監督・村川透、主演・三浦友和で、
国東映系で一斉ロードショーになる。この発表会に
原作者の勝目梓は、分刻みの原稿締切りも忘れ、
ョイ役出演があるのか、と終始気を揉んでいたが、それは不明。

TOKUMA NOVELS

ハード・サスペンス

復讐海流

勝目 梓

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

復讐海流 ―― 7
毒の樹氷 ―― 143

復讐海流

第一章　影

1

小さくフォンがひびいて、禁煙のサインが点灯された。

エール・フランス七二三便は、成田空港をめざして下降をはじめようとしていた。

フランス語と英語と日本語の案内放送が機内に流れた。

その乗客は、中程の通路側の座席にいた。四十歳そこそこに見える大柄な男である。肌の色が褐色である。髪がパーマをかけたようにちぢれている。鼻の下に蓄えた髭は濃い。いくらか太目に刈りそろえてある。濃いサングラスをかけている。その下の眼はするどい。淡いグリーンの上下のサマースーツに、同系色のネクタイをしめている。

肌色のせいか、一見、アラブ人に見える。が、唇の肉は厚く、アジア系の人間とも思える。連れはいない。ド・ゴール空港で乗り込んで以来、男はほとんど眼を閉じたままで、シートに頭をもたせかけていた。眠りつづけているわけではなかった。

その証拠に、機内食のサービスや、飲物のサービスにスチュワーデスが回ってくると、男は眼をあける。そして流暢なフランス語か英語かで、スチュワーデスとの用を足している。相手がフランス語で声をかけてくるか、英語で呼びかけてくるかで、男は二つの国のことばを使い分けていた。

機内には日本人のスチュワーデスも乗り込んでいた。彼女たちの一人は、パリを飛び立って間もなく、毛布を手にして日本語で男に声をかけた。相手を日本人と見たのだろう。男は巧みな英語で毛布はいらない、と答え、代りにマガジンかニュースペーパーを読みたい、と言った。

それ以来、乗り組んでいる他の日本人スチュワーデスたちも、彼には英語でしか呼びかけなくなった。

給油のために飛行機がアンカレッジに降りたときも、男は空港の待合室の椅子に腰をおろしたまま、窓の外

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に眼を投げていた。
他の乗客たちのように、免税品の売店をまわることもしなかった。うどんを売っているスタンドもあったが、男は見向きもしなかった。ただ、殺風景な空港の光景と、その先の荒涼とした低い丘の連なる景色に眼を向けているだけだった。
飛行機の高度が下がり、窓から地上のようすが眺められるようになった。男は首を回して、短い間、それを眼におさめているようすだった。
着陸は見事だった。気の早い乗客たちは、早々と立ち上がって、棚から荷物をおろしたり、足もとにおいたバッグを膝に上げたりしはじめた。
男は動かない。まだ眼を閉じている。顔には何の表情も見られなかった。荷物は棚に上げた大型のアタッシェケースだけである。
男の横の窓側に乗っていたのは、日本人の若い女の二人連れだった。二人は手に小さなバッグと、アンカレッジ空港の免税店のビニール袋とをさげて立ち上がった。
「エクスキューズ・ミー」
女の一人が、ためらった末に男に声をかけた。ひどい発音を、精一杯の笑顔でカバーしている、といったようすだった。
男は立っている女を見上げ、一呼吸おいてから、黙って腰をひねり、脚を通路に出して、女たちに道をあけてやった。
「ごめんなさい……」
二人の女は頭をさげて通路に出た。一人が首をひねって連れにささやいた。
「おかしいな。あたしの英語でもエクスキューズミーぐらいは旅行中、どこでも通じたんだけどな」
「自信なくした？　でもいいじゃない。もう日本に着いたんだもの……」
二人の女は短く笑い声をあげた。
入国手続きの窓口にも、人があふれていた。男は急ぐようすもなく、列についている。
順番が来て、男はパスポートを係官の前にさし出した。イラン国発行のパスポートだった。マハド・サーラム、三十八歳――パスポートにはそう記入してあった。係官は機械的に旅券にスタンプを押し、男にもどした。
預けてあった大きな旅行トランクを受け取ると、男

は税関のブースの前の列に加わった。係官は男が台の上に上げたトランクとアタッシェケースを開け、中身を調べた。アタッシェケースの中は、大版のノートと地図と、ペーパーバックスの本が何冊かと、他には洗面道具入れのバッグなどだった。

税関の係員は、入念な手つきでトランクの底まで探り、終えると男を促した。

男はトランクの蓋を閉め、アタッシェケースを手にさげると、ブースを通り抜けた。そのまま男は、両替所の窓口に向った。男が窓口に出したのは米ドルだった。

男はそこで、コインも含めて三十万円余りの日本円を受け取った。そのときも男は必要なことをなめらかな英語で相手に伝えた。

つぎに男がしたことは、一階のロビーの公衆電話で、どこかに電話をすることだった。

男は黄色い電話に、両替したばかりの百円硬貨を入れた。男は回すべき電話番号をそらんじていた。メモも手帳も取り出さずに、ダイヤルを回した。そして男の口からは、はじめて日本語がすべり出た。訛も奇妙なアクセントもない、立派な日本語だった。

「おれだ。いま着いた。ホテルはどこ？」

男はそう言った。相手の答えは短かった。男が返したことばも短かった。

「じゃあ」

それだけ言って、男は電話を切った。

2

二時間後――。

マハド・サーラムと名乗る、日本語の達者な男は、新宿のスカイ・ホテルのフロントに現われた。

日本語は使わなかった。英語で用を足した。宿泊カードには、マハド・サーラムと署名し、出発の予定を二日後と書き込んだ。

ボーイが男のトランクを持って案内に立った。

部屋は二十一階のシングル・ルームだった。ボーイが部屋を出ていくと、男は上衣を脱いでベッドの上に投げた。つづいて、ベッドの枕もと近くに腰をおろし、横の台の上の電話の受話器を取り上げた。空港で回したのと同じ番号を、彼はダイヤルした。

「ホテルに着いた。二一七七号室だ」

電話は今度もすぐに終った。男が口にしたのはそれだけだった。

受話器をもどすと、男は脱ぎすてたスーツのポケットから、細巻きのシガーを出してくわえた。ライターを手に持ったまま、彼は窓ぎわに行った。

窓のカーテンは閉じてあった。男はそれを大きく左右に開けた。真夏の午後の光が射し込んできて、部屋を明るくした。

眼の下に新宿から落合、四谷あたりまでの街並みがひろがって見えた。街は白く煙ったように見える。

男はそれを眺めたまま、シガーに火をつけた。深く吸った煙を、男は息の音を立てて長くゆっくりと吐き出した。サングラスの下の眼は、細められていた。眼を細めると、男の頬の薄い横顔には、酷薄な印象が宿って見えた。

男は五分ほど、窓際に立って街を見おろしていた。シガーはとっくに喫い終えていた。カーテンを閉めて、窓際を離れると、男はバスルームに行き、バスタブに湯をためた。

部屋のドアがノックされたのは、男がバスルームから出て来て間もなくだった。

男は返事をしなかった。バスタオルを腰に巻いたまま、足音を殺すようにしてドアに向った。ドアスコープをのぞき、ドアに体をつけるようにしてノブを回した。

入ってきたのは若い女だった。白地に紺の抽象模様のある、ノースリーブのワンピースを着て、長い髪を無造作にうしろで束ねていた。飾り気のない装いが、かえって小造りな女の顔立ちの美しさをきわだたせていた。

男はドアをしめ、ドアチェーンをかけた。女はそれが終るのを待ちかねたようにして、男の胸にとび込んできた。手にさげた白いハンドバッグが、裸の男の背を小さく打って揺れた。男は女の髪を撫で、頬ずりをした。

二人の唇が合った。深く舌がからみ合った。すぐに二人は唇を離した。男は女の肩を抱いて、部屋の奥に促した。

男はベッドに腰をおろした。女も並んで坐った。女は男のバスタオルにくるまれた膝に手を突いて、男を見上げるようにした。

「一年三カ月ぶりね。別人みたい。日本人には見えな

いわ」
「肌を灼いたり、いろいろこれで、金がかかってるんだ」
「でしょうね。街でいきなり会っても田代剛だとはあたしも判らないわ」
「世話をかけたな、香代子。礼を言うよ」
「いいのよ。でも、よく無事で帰ってこれたわ。何から話したらいいのか……」
女の声は湿ってふるえた。
「おれもそう思うよ。日本を捨てようと何度思ったか知れないんだ」
「だと思うわ。日本じゃ田代剛は、うまく国際指名手配の網をくぐって逃げ切った、とみんなに思われてるのよ」
「自分の国に密入国したのは、おれぐらいのものじゃないかな」
男はうっそりと笑った。
「奥さんと子供さんは、北海道の奥さんの実家にいらっしゃるそうよ。だいぶんまえに週刊誌に出てたわ」
男はうなずいただけだった。女も口をつぐんでうつむいた。
「どうしても諦めきれなくてな……」
しばらくして男が言った。
「家族のこと？」
女はうつむいたまま細い声で訊いた。
「家族のことはいいんだ。ただ……」
「ただ、なに？」
「おれを裏切った奴ら、おれを罠にはめた奴らをどうしても赦せなくて、おれは自分の国に密入国してきたんだ」
「やるの？　やっぱり……」
「やる。このまま世間から葬られるのはたまらないからな」
「あたしが裏切るとは思わなかった？」
「思ってれば、香代子に連絡なんかしない。おかげで事件以来、おれにも人を見る眼が、遅まきながら出てきたつもりだ」
女は男の肩に顔を埋めた。背中が小刻みにふるえ、女の眼から涙がこぼれ出た。涙は男の肩から背にすべりおちた。
「あなたのやろうとしていること、手伝うわ。あたしにできること、ない？」

「いまのところはないよ」
「預ってるお金はいつでも渡せるわよ」
「必要なだけずつもらう。残ってるのは香代子に預けた金だけだろうと思うな」
「アリバイが要るでしょう？　あなたが復讐をはじめれば、田代剛が日本に帰ってきてるって、すぐに判ってしまうんじゃない？」
「パリから債権者宛に、おれの自筆のエアメールが、ときどき届くように手を回してある。偽の旅券を手に入れてくれた男の世話でね。うまくやってくれるはずだ」
「抱いて！」
女はむしゃぶりつくような勢いで、男の肩に腕を回した。
「一年三ヵ月、あなたのことばかり考えて暮してたわ！」
女は低く叫ぶように言った。男は女を抱いたまま、体を倒した。二人は体を重ねたまま、ベッドの上で反転した。男は上から強く女の細い腰を抱きしめ、胸に頬ずりをした。
女は服の胸を押し開き、ブラジャーのホックをはずしてはだけた。量感のある乳房が重く揺れながら現われた。男はそれを静かに撫で、そこに顔を伏せた。

3

大沢（おおさわ）香代子が、新宿のスカイ・ホテルの、二一七七号室を出たのは、午後十時ちょうどだった。
部屋を出る直前に、香代子は窓際のテーブルの上に、バッグから取り出した登山ナイフを黙って置いた。新しいナイフだった。
「ありがとう……」
田代剛は言った。ナイフに短い視線を送ると、田代はドアの傍まで、香代子を送って出た。
一時間後に、田代剛も部屋を出た。黒い半袖のポロシャツに、黒いズボンという姿だった。靴は黒のブーツである。ブーツの中には、登山ナイフがさし込んであった。ドアの前で、彼はサングラスをかけた。
田代はフロントに部屋の鍵を預けると、玄関の前でタクシーに乗った。運転手に、行先を告げた。英語だった。ヨコハマ、イセザキチョウ、と田代は外国人の発音をまねて、ゆっくり何回もくり返した。

運転手は何回目かに、おおげさにうなずいて、走り出した。

高速道路はすいていた。田代は、伊勢佐木町のアーケード街の入口でタクシーを降りた。

そのまま彼は、運河ぞいの道を石川町のほうに歩きはじめた。

電柱に石川町という町名標示板があった。そこで田代は足を停めた。ズボンのポケットから、小さく畳んだ紙を出してひろげた。紙には地図の略図と〈レインボー・ハイツ〉という文字が書かれていた。

田代は外灯の明りでそれを見ると、紙を細かくちぎって捨てた。

ふたたび彼はゆっくりと歩きはじめた。

小さな丘を背負う形に建った、瀟洒なマンションがあった。

田代はそこの手前で足を停めた。道に人影はなかった。車の音も絶えていた。

田代は道の端に立って、シガーに火をつけた。しかし、すぐに、それをもみ消して、喫いかけをポケットに押し込んだ。

田代はふたたび歩き出した。マンションのポーチの屋根が、道の端まで突き出ていた。屋根の先端には、レインボー・ハイツという、金色をした金属の型抜きでこしらえた文字が並んでいた。

ポーチの明りで、田代は腕の時計を見た。午前零時半になろうとしていた。レインボー・ハイツの窓の明りはあらかた消えている。

田代はポーチをくぐり、玄関のドアを押して入った。まっすぐエレベーターに向った。エレベーターは五階で停まっていた。田代はボタンを押した。

エレベーターのモーターの唸るかすかな音がひびいた。ホールに人影はない。

エレベーターのドアが開いた。田代は乗り込み、五階のボタンと、ドアを閉めるボタンを同時に押した。

そのマンションに、中杉博という四十過ぎの男が一人で住んでいる。そのことは、田代が日本を留守にしている間に、彼の連絡で大沢香代子がこっそり確認していた。

香代子の話では、中杉博の職業は不明ということになっていた。

五階の中杉の部屋のドアの前で、田代は足を停めた。廊下も、並んだ部屋のドアの内側も、静まり返ってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com